

## 要旨

本論文は文献分析法、事例研究法を用いており、近代西洋人の漢字知識について分析した。彼らは西洋人であるからこそ、中国人より漢字への感度が高く、より客観的に漢字の特徴を記述してきた。また、宣教師の中国語研究、漢字研究は高い精密性、体系性も持っている。分析する際に、単一の資料に限らないこと、相互の引用や参考の関係、同一人物の見解の変化、古典典籍の影響などの点に注意しつつ、展開していった。

早期においては、M.ルッジェーリ (Michele Ruggieri) や M.リッチ (Matteo Ricci) を中心とし、19世紀以降では、R.モリソン (Robert Morrison)、S.W.ウイリアムズ (Samuel Wells Williams)、W.ロブシャイド (Wilhelm Lobscheid)、H.A.ジャイルズ (Herbert Allen Giles) を西洋人、宣教師の代表としている。著者はこの問題を論じる際、モリソンの来華を分岐点として二つの時期に分けることができると考えており、モリソン来華前を蓄積期、来華後を発展期としている。

第一章は、ルッジェーリの『葡漢辞典』(ARSI 所蔵) 漢字表やリッチの『西国記法』(Gallica 所蔵) を用いて、分析してきた。早期の漢字学習は形体を重視しており、図画法も取り入れている。『西国記法』に記された方法は伝統的な小学知識と彼自身の理解とを融合してきたものであり、エピソード記憶に似ている。早期において、西洋人たちが漢字の整理、分類する際に、錯綜や混乱も見られる。

第二章は、モリソンが漢字の形体、字語関係などへの論説に注目した。漢字の三要素に対して、モリソンは形体の重要性を主張している。そして、モリソンの漢字観において、使用の面では、書面語の「字」や口語の「言」という区別も意識している。彼の後継者であるメドハーストでは、モリソンと異なって、漢字の音や義の方を重視しており、また、文脈に応じて、単語のコロケーションを強調している。

第三章は、ウイリアムズが使用した Primitive 体系を中心に論じていた。Primitive 理論はマーシュマン (Joshua Marshman) に由来し、Primitive の分類、応用などの点で、さらに改善、発展させた。primitive 理論も宣教師たちに広く受け入れており、19世紀半ば以降、primitive 体系、音符体系を用いて、編纂された辞書、教材も多く見られる。

第四章は、ロブシャイドの漢字観に注目し、彼は漢字の形成について、自分の推測を提出し、特に音符の役割や機能を重視しており、音符から漢字の形成における機能と、文に与える影響を分析したが、その理論の局限性も見られる。そして、ロブシャイドが中国の

なぞなどを用いて、自分の中国語教材に導入している。しかし、語呂合わせ、俗語は非漢字文化圏の学生には難易度が高く、一部の単語や文を翻訳の際に対応する形式を見つけることが困難だという欠点もある。

第五章は、ジャイルズの作品を用いて、彼の漢字知識、漢字教材の特徴などを分析した。ジャイルズに至り、西洋人の漢字研究は最高峰に達し、彼はその集大成者である。漢字の分類について、彼は字音に重点を置き、象形字、表意字、音声字に分ける方法は、唐蘭の「三書説」と近い。他の宣教師と比較して、彼は甲骨文の資料を使用しているため、漢字の起源や特徴の記述はさらに正確で、高い科学性を持っており、現代中国語研究にも遜色ない。

第六章は、「周縁」に誕生された研究法、学習法も注目しており、ジェンナーと彼の著作『字典標目』を中心に、そして、19世紀半ば以降における記憶助記法の応用や影響を分析した。宣教師がよく取り上げた翻訳法に比べて、記憶助記法は斬新であり、初級学習者が漢字を記憶するのに役立つが、過度の負担をもたらした可能性もある。

16世紀から始まり、約300年の西洋人中国語研究、漢字研究は、蓄積から発展へ、錯綜から科学へと進化していた。彼らの論述や思考は、今日の研究や教育にとっても参考にする価値がある。これらの宣教師が作成した辞書、教材は実際に使用されたものであり、示唆的な意味もある。そのため、中国語教育、漢字教育あるいは教材を作成する際に、彼らの作品から優れた部分を学び取り、応用、参考にすべきである。